

# 常光寺々報

2022. 11

## 報恩講法要

十二月三日（土）

朝十時～十二時

昼一時半～三時半

本願寺派布教使

御講師 渡辺 浄道 先生

空気循環のため、本堂は換気をし  
ながら暖房いたします。暖房効果  
は高くないと思われまますので、温  
かくご聴聞できるよう、各自ご準  
備ください。お経本とお念珠をお  
持ちください。引き続きマスクの  
着用もお願いいたします。  
時節柄お斎の用意は致しません  
のでご承知おきください。

世間ではコロナ第八波が言われ

ており、自粛の風潮はまだまだ無

くなりません。そんな中ですので、

今年もうち勤めではありませんが、

常光寺の報恩講法要を、前任職の

一周忌法要を合わせてお勤めいた

します。皆様にもお焼香をしてい

ただければと思います。尚、お香

典の儀は拝辞させていただきます。

この度のご講師の渡辺先生は、

以前にもご出講いただいたことが

ある埼玉県朝霞市にある浄心寺の

住職で、布教所からお寺を創設さ

れたお寺の開基となる先生です。

どうぞ、皆さまもこの度のご縁を

大切にお参りされ、ご聴聞いただ

きますよう、ご案内申し上げます。

お寺のホームページからも

寺報をご覧いただけます。

下記QRコードよりお入り  
ください。



## 年忌法要早見表

来年（令和五年・二〇二三年）の

年忌のご案内をさせていただきます。

一周忌・・・令和四年

三回忌・・・令和三年

七回忌・・・平成二十九年

十三回忌・・・平成二十三年

十七回忌・・・平成十九年

二十三回忌・・・平成十三年

二十七回忌・・・平成九年

三十三回忌・・・平成三年

五十回忌・・・昭和四十九年

## 修正会

一月三日十時半～

時節柄、今年同様に短くお勤めさ

せていただき、お斎のお餅も控えさ

せていただきますが、新年のお勤め

を皆さんと共に参りさせていただきます。

きたいと思っております。

## 立教開宗八百年慶讃法要

### 本願寺の歴史

本願寺は、親鸞聖人の廟堂（びようどう）から発展した。親鸞聖人が弘長2年（1263）に90歳で往生されると、京都東山の鳥辺野（とりべの）の北、大谷に石塔を建て、遺骨をおさめた。しかし、聖人の墓所はきわめて簡素なものであったため、晩年の聖人の身の世話をされた末娘の覚信尼（かくしんに）さまや、聖人の遺徳（いとく）を慕う東国の門弟達は寂莫（せきばく）の感を深めた。そこで、10年後の文永9年（1272）に、大谷の西、吉水の北にある地に関東の門弟の協力をえて六角の廟堂を建て、ここに親鸞聖人の影像（えいぞう）を安置し遺骨を移した。これが大谷廟堂である。

大谷廟堂の留守職は、覚信尼さまの後に覚患上人、その次に孫の覚如上人が第3代に就任した。覚如上人は三代伝持（さんだいでんじ）の血脈

を明らかにして本願寺を中心に門弟の集結を図った。三代伝持の血脈とは、浄土真宗の教えは、法然聖人から親鸞聖人へ、そして聖人の孫の如信上人へと伝えられたのであって、覚如上人はその如信上人から教えを相伝（そうでん）したのであるから、法門の上からも留守職の上からも、親鸞聖人を正しく継承するのは覚如上人であることを明らかにしたものである。

本願寺の名前は、元亨元年（1321）ころに公称し、覚如上人の晩年から次の善如上人にかけて親鸞聖人の影像の横に阿弥陀仏像を堂内に安置した。これを御影堂（ごえいどう）

と阿弥陀堂（あみだどう）の両堂に別置するようになったのは、第7代の存如上人のときである。

〔本願寺教学研究HPより〕抜粋

令和5年は宗祖親鸞聖人のご誕生（1173）から八五〇年目にあたり、その翌年は聖人が『顕浄土真実教行証文類』（1224）を著された「立教開宗」から八百年をお迎えする年となります。

八百年の長きにわたりお念仏の教えを伝え継いでくださった善智識の方々の有り難さに頭が下がります。

日々お仏壇に向かい、敬虔にお念仏申させていただく大人の背中が、子供たちに大切なものを伝えてくださったのでしよう。

南無阿弥陀仏